01
人生を二本の線で見る
政治×家庭の全体年表

02
想いを言葉にする
本人と家族の願い

03
年月ごとに組み立てる
学び・子育て・住まい

04
仕事と家庭の分岐
立候補・家計・引退

FUTURE AUTOBIOGRAPHY / LIFE PLANNING

まだ歩いていない人生を、企画する。

35歳の会社員が政治家を志す。その決断を、結婚、子ども、住まい、家計と切り離さず、2063年頃までの一つの人生として組み立てる。



政治家を目指す本人だけでなく、パートナーにも独立した仕事や願いがある。結婚・子ども・住まいを確定事項にはせず、互いの合意と生活条件を踏まえて選び直せる人生企画書とした。

想定主人公：35歳・会社員（架空）｜2026年から2063年頃｜政治への挑戦 × 家族と暮らす人生（すべて仮設定）

MAP／仕事と家庭、二つの時間軸

一つの志が、家族の時間と交わる。

政治家としての人生と、夫・父としての人生。別々の年表ではなく、同じ出来事から互いが変わる二本の線として描く。

	政治への道｜志・学び・役割	家庭の道｜パートナー・子ども・住まい
2026–29 35–38歳	**会社員のまま学ぶ** 地域の課題を調べ、生活に根ざした政治の志を育てる。	**結婚と暮らしの相談** パートナーとの将来、家計、互いの働き方を話し合う。
2030–34 39–43歳	**地域活動を育てる** 学習会、公開資料、政策提案へ進む。	**子育て期を想定** 子どもを望む場合の生活設計。仕事と育児の分担を整える。
2035–37 44–46歳	**立候補を判断** 選挙、仕事、活動方法を現実の条件から選ぶ。	**家族の安定を優先** 教育、住居費、生活防衛資金を見て、住まいの大きな変更は慎重に。
2038–44 47–53歳	**公的役割を担う／別の道** 当選時は議会活動、落選時は地域活動を再構成。	**住まいを選び直す** 通学・通勤・収入の見通しから、賃貸継続か購入かを判断。
2045–54 54–63歳	**役割を深め、継承する** 政策の検証と後進育成を考える。	**子の自立と夫婦の再設計** 教育費の山を越え、二人の時間や住まいを見直す。
2055–63 64–72歳	**引退と経験の継承** 肩書きを離れて地域に関わる。	**これからの夫婦の生活** 住み慣れた町で無理のない暮らしと新しい時間をつくる。

この企画書で考える「人生のつながり」

子どもを育てる経験が交通・教育・福祉への関心を深める。一方、政治への挑戦は家族の時間と家計に影響する。**どちらかを脇役にせず、選択のたびに二つの道を組み直す。**

結婚・子ども・購入・当選は全て想定された選択肢。特定の人との運命的な出会いや将来の結果を創作していない。

ROADMAP／年月を揃えて読む

同じ年の出来事が、次の選択を変える。

仕事と家庭で別の年表をつくらず、2035年の出馬、2041年の住まいなど、人生の選択点をそろえる。

年月・年齢	政治・仕事のイベント	家庭・生活のイベント（仮）
2026.11 35歳	地域交通への問題意識を文章にする。	将来を考えるパートナーと、仕事と家庭の希望を整理し始める。
2027.03 36歳	自治体の議会議事録・予算書の学習開始。	二人の時間・生活費・貯蓄の見通しを共有する。
2029.09 38歳	仕事を続けながら地域活動を継続。	結婚を一つの目標時期として検討し、住まい・家計を共同で設計。
2032.11 41歳	解決案を3案に絞って比較。	子どもを望むなら、育児期の働き方・生活費・住まいを再検討。
2034.04 43歳	職場の担当業務を引き継げる形に。	子育て・配偶者の仕事・家庭内分担と政治活動の時間配分を点検。
2035–37 44–46歳	立候補の可否を決め、準備する。	生活費の備えと学校・住居の安定を条件に、夫婦で働き方を決める。
2041頃 50歳	当選なら政策提案と検証、落選なら役割を再検討。	子どもの教育環境・収入・活動場所を確認して購入か賃貸か判断。
2048頃 57歳	交通・福祉・住まいの連携に取り組む。	子どもの進路と教育費を見通し、夫婦の生活計画を更新。
2055頃 64歳	次世代への資料・経験の継承開始。	子の自立後、夫婦の働き方・住まい・健康を再設計。
2062–63 71–72歳	引退の判断、地域に関わる形を変える。	二人が希望する暮らしを優先し、無理のない住居と日常へ。

表の読み方

右列は政治の成功を飾るための「家族イベント」ではない。結婚も出産も本人一人では決められない。**家族の希望が変われば政治の進め方を変え、政治の条件が変われば生活を再設計する。** その関係をこの先のページで具体化する。

01／想いを回想する

会社員の私が、町のことを考え始めた。

大きな理想を掲げたかったわけではない。

会社に行き、帰宅し、休日には買い物をする。毎日はそれなりに忙しく、それなりに満たされてもいた。けれど、住み慣れた町を歩くたびに、気になることが少しずつ増えていた。駅から離れた住宅街の移動の難しさ。日常の用事が、車を使えない人にはひと仕事になること。公共の仕組みを誰かが決めていると知ってはいても、私は長い間、それを自分の仕事ではないと思っていた。

社会の仕組みに関心がないわけではない。ただ、「おかしいと思う」と口にするだけなら誰にでもできる。その次に何をすればよいのか、私は知らなかった。

会社では、数字を見て状況を整理し、関係者と調整し、相手に伝わる資料をつくる仕事をしている。大きな決定をする立場ではなくても、問題を一つずつほどき、少しずつ前へ進める仕事にやりがいを感じてきた。

> 「この経験を、会社の外でも使えないだろうか。
> もし、暮らしている町のために使えるのなら。」

政治家という言葉には、いまも少し距離がある。自分とは違う世界の人の仕事に見えるからだ。それでも、議会で話し合われていることが、毎日の暮らしを少しずつ変えていくのだとすれば、あの場所に立つことを、最初から自分と無関係だと決めつけたくはない。

私は、肩書きに憧れているのだろうか。そうではないと思う。知りたいのは、困っている人がいることを知ったあと、自分はどこまで引き受けられるのか、ということだ。

このページの役割

架空の主人公が語ったと仮定した「想い」の文章例。実案件では、本人の実際の発言・経験から編集する。本人が話していない記憶や感情を事実として付け加えない。

02／構想として定義する

政治家になることは、ゴールではない。

想いを「肩書き」から「行動と役割」へ言い換える。

この企画の中心

地域で感じた小さな問題を、調査・提案・議論・実行の過程に乗せる。その役割を、人生を通じて引き受ける。

立場が変わっても、同じ仕事が続いていく

会社員	地域の一員	議員〈条件付き〉	次世代の支え手
調査・説明・調整する力を持つ	課題を聞き、提案を確かめる	公的な場で問い、議論する	経験・情報・役割を渡す

変えていくもの

居住地域の移動に関する課題を一つの入口として、数字と現場の実感の両方を持って議論できる地域活動を育てる。

結果を一つの事業だけで測らず、課題の整理、議論の透明性、検証の継続も成果として残す。

守りたいもの

家族や本人の暮らしを壊してまで、政治家という肩書きを追わない。資金・仕事・健康・家族の合意を条件に、挑戦する時期を見直せるようにする。

議会に立てなければ人生が失敗、という構図にはしない。

この先の章の読み方

2027年の学習は2032年の政策案に、2034年の家計点検は2036年の立候補判断に、2054年の育成は2063年の引退後へつながっていく。

03／2026–2029年・35〜38歳

会社員として働きながら、政治に必要な目を養う。

2026年11月

自分が向き合いたい問題を、一文にする。

移動に困る人がいる、という漠然とした印象を「地域の移動手段と生活の選択肢」という調査テーマにする。会社の仕事を続けることを前提に、毎週3時間を学習に充てる。

2027年3月

公開資料から、自治体の現状を読む。

総合計画、予算、議事録、人口や交通の公開統計を読み、用語と制度をノートにまとめる。「困っている」という感覚と、行政が把握している課題を比べる。

2027年9月

現場で聞く力を身につける。

参加できる地域活動で、住民・公共交通利用者・事業者の関心を把握する。誰かとの劇的な出会いではなく、多様な立場を継続して理解する方法を学ぶ。

2028年10月

はじめて「問題と選択肢」を一枚にする。

徒歩移動、バスの待ち時間、公共施設へのアクセスなどの論点を整理。課題の場所、対象、考えられる改善策、未確認事項を示した短いレポートを作る。

2029年6月

説明できる人になる。

レポートを公開情報と意見に分けて更新。外からの指摘を受けて修正し、意見の違いを整理する力を育てる。

この段階で得るもの

行政資料を読む力／客観的事実と主観を分ける力／課題を図解する力／相手の話を聞いて論点を整理する力。これが次の「地域活動」につながる。

家庭との接点：2029年頃に結婚を考えるなら、地域の学習・活動の時間だけでなく、二人の仕事と生活の約束を先に話し合う。

04／2030–2034年・39〜43歳

一人の関心を、地域で共有できる議題へ。

2030年4月

小さな勉強会を定期化する。

公開の会場やオンラインを使い、地域の交通・生活環境をテーマに資料を読み合う機会をつくる。特定の支持を求める場ではなく、立場の異なる意見を整理する場として運営する。

2031年2月

最初の「地域課題ノート」をまとめる。

意見の件数ではなく、論点の種類、現状、制約、担当部署、既存の制度を整理。事実確認が必要な部分は未確認と記し、発信内容を更新する。

2032年11月

対案を3つに絞り、比較する。

既存路線の改善、移動の支援、施設配置の見直しなどを比較し、費用・対象者・実施主体・副作用を明らかにする。解決策を一つに決めつけない。

2034年4月

会社員としての経験を引き継ぐ準備を始める。

現在の職場で担当業務を標準化し、後輩に説明できる状態にする。挑戦するなら仕事をどう続け、あるいはどう離れるか、家計と生活を含めて考え始める。

活動を「実績」と呼ぶ条件

情報公開
議論に使った資料と更新履歴を残す。

反証と修正
違う意見を踏まえて提案を見直す。

ここでの成果は「政治家として人気が出た」ではなく、課題を人と共有し、次の議論へ進める材料が整ったこと。

> **家庭との接点：**子どもを望む場合、地域の交通・保育・教育の課題は、実際の暮らしの選択として現れる。育児を政治活動の「材料」にするのではなく、家庭内の時間分担を守る。

PRIVATE LIFE／2026–2034年

一緒に暮らす未来を、仕事とともに決めていく。

この主人公には、2026年時点で結婚を考えるパートナーがいるというサンプル設定を置く。将来の見知らぬ誰かとの出会いは創作しない。

政治への思いが強くなっても、二人の暮らしは「協力してもらうもの」ではない。パートナーにも望む働き方、過ごしたい時間、生活の優先順位がある。そこを起点に家庭の計画を組み立てる。

2027年春・36歳

将来の暮らしについて、二人で条件を出し合う。

結婚を望むか、働く場所を変えるか、子どもを望むか、家計をどう管理するか。まだ決めきれないことは保留にし、互いの希望を項目にして整理する。

2029年秋・38歳〈目標時期〉

結婚するなら、活動の前に生活の土台をつくる。

合意が整えば婚姻と共同生活を始める。住まいは当面賃貸を想定。仕事、家賃、貯蓄、家事分担を無理のない範囲で調整する。結婚を急ぐこと自体は目標にしない。

2032年頃・41歳〈条件付き〉

子どもを迎える未来を考える。

二人が希望し、状況が整う場合のシナリオ。子育ての時間、働き方の変更、医療・保育・住まいを具体的に調べる。子どもを持たない人生であっても、政治への志は変わらず組み立てられる。

2034年・43歳

政治活動を、家庭の予定から逆算して組み直す。

勉強会や現地調査を増やす前に、家庭に必要な時間を確認する。家事・育児の負担が一方に寄らないよう調整し、活動を増やすかどうかを決める。

この時期に見える、人生のつながり

育児や通勤の経験から「暮らしの移動」の問題が具体的になる。一方で家庭の時間は有限。政治の課題を知るほど、家族の生活を守る決め方が必要になる。

05／2035–2037年・44〜46歳

立候補を、人生の決断として扱う。

政治活動を続けることと、議員になることは同じではない。ここで初めて、家族や生活を含めた「立候補するかどうか」の判断をする。

2035年1月｜立候補条件を確認

候補となる自治体、被選挙権、実際の選挙時期、必要な手続き、政治活動と選挙運動の違いを、選挙管理委員会等で確認する。

2035年8月｜生活の条件を整理

退職・休職を含む仕事の選択肢、家計の固定費、積立、予備費、家族との調整、落選後の生活を点検する。

2036年・45歳｜判断の節目

① 立候補できる条件が整ったか　② 地域への提案が形になったか　③ 暮らしを維持できるか。どれかが不十分なら、時期をずらす選択も企画の一部。

当落で終わらない、二本の道

当選した場合

議会の仕組みを学び、予算・議案・審議を理解し、住民への説明と検証を積み重ねる。2037年以降の「議員としての人生」へ進む。

当選しなかった場合

暮らしと仕事を立て直し、活動を続けるか、再挑戦するか、議員とは別の公的役割に軸を移すかを選び直す。

公職選挙法上、特定の選挙での投票依頼を含む選挙運動には期間等の制限があります。2036年を実際の選挙年として特定するものではありません。制度は実施時点に公式情報で確認します。

家庭との接点：出馬するかどうかは本人の志だけで決めない。配偶者の意思、子どもの通学・保育、現在の住まい、収入が変わった場合の家計を一緒に検証する。

DECISION／2035–2037年

政治への挑戦を、家庭の決断とつなぐ。

2036年・45歳の節目：「立候補したい」という本人の希望があっても、配偶者の仕事、子どもの日常、今の住まい、家計の安全を抜きに結論を出さない。

政治の側で決めること

候補となる地域、政策の骨格、実務を任せられる範囲、立候補の法的条件。会社員を続けるかどうかは就業規則と個別の条件を確認する。

家庭の側で決めること

配偶者の仕事と収入、子どもの保育・通学、日常の家事育児、家族の時間、生活資金。無理な負担を家族に引き受けさせない。

家庭の事情が、政治の進め方を変える具体例

① **家計に十分な備えがある** → 立候補の時期を正式に検討。選挙費用と家計資金を分けて管理する。

② **子どもの成長期と重なる** → 家族時間を先に確保し、活動日数や担当を再設計。家庭の生活リズムを崩さない方法を選ぶ。

③ **収入・時間の条件が足りない** → その年の出馬は見送り、会社員のまま政策研究や地域活動を続ける道も残す。

2037年以降：選挙結果に応じ、家庭計画も再設計

当選した場合

新たな職務の時間・収入・活動拠点を把握し、家事・育児の役割を再調整。住居の購入は収入の安定を見極めて判断する。

当選しなかった場合

生活費を優先して働き方を立て直し、地域活動は継続可能な範囲へ。再挑戦するかどうかも、家庭の状況と合わせて見直す。

政治家を目指す人生であっても、**家族がその夢のための道具になるわけではない。** 自分の希望と家族それぞれの希望を両立させる工夫こそ、人生の企画内容になる。

06／2037–2044年・46〜53歳

議席を得たなら、何を積み重ねるのか。

ここからは「当選した場合」の条件付きシナリオ。実績や成果を先に確定しない。

就任後・最初の1年

議会の仕事を、現場と結びつける。

議案の読み方、予算、委員会、自治体職員との役割分担を理解。移動の課題について、過去の議論と現場の声を照合する。

2039年頃

提案を「実施可能な単位」に切り分ける。

優先地域、対象者、既存制度との関係、費用、評価方法を整理。議会での質問・提案と、行政側の検討を区別して記録する。

2041年頃

結果が出なければ、方法を変える。

提案が採用されない、予算がつかない、期待した効果が出ない場合も想定する。実施条件を見直し、意見を集め直して改訂案を提出する。

2044年頃

成果と未解決の問題を、後から読める形にする。

何を問うたか、どの判断に関わったか、何が実施され、何が保留になったかを年次で整理。政策の成果を自分一人の手柄として扱わない。

議員期の一連の作業

把握	議論	実施	検証
意見・実態・数値	予算・制度・優先順位	所管部局による対応	結果の説明と修正

家庭との接点：公的役割が増えるほど家族と過ごす時間の確保が必要になる。役割分担は配偶者の希望を尊重し、定期的に見直す。

07／2045–2054年・54〜63歳

経験が増えた先で、役割を変えていく。

最初に関心を持った「移動」の問題だけで、地域の暮らしが成り立っているわけではない。議員としての経験が積み重なれば、交通、福祉、住まい、都市計画のつながりを扱う必要が出てくる。

2045年4月	**交通と福祉の関係を整理。** 高齢者の外出、公共施設へのアクセス、福祉サービスの利用を別々の問題として扱わず、関係する部署や制度を図解する。
2048年12月	**事業の継続性を点検。** 過去に取り上げた提案について、費用、利用状況、住民の声、未解決の課題を再確認する。成果が弱ければ再設計する。
2051年9月	**専門性を次の役割に変える。** 交通と生活の課題に関する公開資料を整理し、関心のある市民や後進にも読める形で残す。
2054年4月	**「自分がいないと進まない」を卒業する。** 議会内外の役割を共有し、自分が担当してきた案件の経過・資料・検討点を引き継げる状態へ。

この時期の転機は、昇進ではなく「他者が担える仕事にすること」

「私が取り組んできたこと」を、
「私がいなくても続けられること」に変える。

役職や当選回数を既定の成功とせず、議員活動を継続できている場合の役割の成熟として描く。継続していない場合にも、資料の公開や地域活動など別の形で継承できる。

> **家庭との接点：**子どもの進学や住まいの費用が変わる時期。政治活動の負担を増やす判断と、家庭の生活費・時間を同じ表で確認する。

HOME & FAMILY／2041–2055年

家を持つことも、一つの人生の選択になる。

政治のために家を買うのではない。家庭の暮らしを守りながら、地域との関わりが続く場所を選ぶ。

政治の仕事が続けば、地元との関わりは強くなる。しかし、それだけで住居を決めるのではない。家は家族の日常を支える場所。子どもの学校、配偶者の通勤、家計、将来の夫婦の暮らしをまとめて考える。

2041年頃・50歳

賃貸を続けるか、家を購入するか。

条件が整えば、現在の生活圏内で住宅購入を検討する。子どもの通学、配偶者の勤務先、公共交通、維持費、政治活動の移動を一枚の地図に置く。住居費が増える場合は購入を延期する。

2046年頃・55歳

子どもの学びと、親の仕事のピークを重ねて考える。

子どもがいる想定なら進路の選択時期。教育費の見通しを優先し、政治活動の追加負担や住み替えをむやみに増やさない。夫婦で予算を確認し直す。

2052年頃・61歳

子どもの自立に合わせて、夫婦の時間を組み替える。

子が独立しても、親と同じ地域で暮らすとは限らない。本人と配偶者がこれからどう生活したいかをあらためて相談し、家を持ち続ける理由を考える。

2055年頃・64歳

政治の退き方と、住まいの続け方を一緒に考える。

交通の便、維持管理、住宅費、健康、パートナーの希望を確認する。大きな家に住むことを目標にせず、これからの暮らしに合った形を選ぶ。

住まいの選定条件｜優先するのは生活の持続性

暮らし側
子どもの通学／配偶者の通勤／日常の買い物／将来の移動／管理の負担

政治の側
地域活動へのアクセス／住民との関わり／活動時間／収入が変わった時の負担

08／2055–2063年・64〜72歳

最後の仕事は、次の担い手に渡すこと。

2056年9月・65歳

「次の担い手に必要なもの」を整理する。

過去の議会質問、政策案、関係法令、予算の変遷、うまくいかなかった試みも含めて、学習に使える資料集にする。後進を特定の架空人物として描かず、育成の仕組みを考える。

2059年12月・68歳

引退の条件を自分で決める。

継続する政策案件、体力、家族との時間、次の担い手の状況を点検し、どの任期を区切りにするか判断する。肩書きが人生の中心になりすぎないようにする。

2062年3月・71歳頃

現役の役割から離れる。

条件が整えば議員活動を終える。実際の選挙日程や任期とは切り離した目標時期。未了の案件は資料と検討事項を残し、後に続く人が判断できるようにする。

2063年・72歳

政治家ではなく、一人の地域住民として。

地域の学習会や資料整理、若い世代への経験共有など、暮らしに負担をかけない範囲で関わり続ける。「政治家になりたかった35歳の自分」が、「どう関わってきたか」を見直す。

この人生の結び

当選や役職を最終的な成果に置かない。長く関わった問題が、別の人の手で議論し続けられる状態になることを、一つの到達点とする。

家庭との接点：現役の政治から退く時期は、配偶者の希望する生活、住まい、健康と重ねて考える。「肩書きを離れた二人の暮らし」も人生の到達点。

09／人との関わり・活動する場所

具体的な「誰か」を創作せず、必要な関係を設計する。

未来に誰と出会うかは決められない。すでに将来を考えるパートナーがいるという仮設定なら、その人の仕事と希望は人生設計の出発点になる。住民や行政との関係だけでなく、家庭内で何を共有するかも計画できる。

関わる相手・場所	考えること／続けること
地域住民・利用者	暮らしの困りごとを把握。異なる意見を比較し、聞き取った内容を一方的に代表しない。
交通・福祉の関係者	運行・制度・人員など現実の条件を知り、提案の影響を検討する。
行政・議会	権限、予算、制度、議論の経緯を確認し、責任の所在を整理する。
家族・職場	生活・仕事に負担が生じる転機に、時間や収入の見通しを共有する。
次世代の担い手	結論だけでなく、調べ方・記録・失敗を含む経験を引き継ぐ。

人生の舞台となる場所

調べる場所

自宅・図書館・公開資料。会社員時代の学習拠点。

聞く場所

地域の公共施設や活動の場。異なる生活の声を理解する。

決める場所

家族と相談する場、必要なら議会。責任ある選択を行う。

実際の自治体名、具体的な施設や会場は、依頼者が暮らす場所が分かってから検討する。

BUDGET／家族の暮らしと政治の挑戦

家族の家計と、政治の費用を分ける。

家族の暮らしを守ることが、政治への挑戦を続ける条件になる。

35歳の会社員が、38歳頃に結婚し、41歳頃から子育てを始める場合の仮設定。固定費が変わることを見越し、立候補前の2035〜36年に家計を確認する。

2036年の家庭生活費（例・仮設定）

住まい	食費・日用品	子育て・教育	光熱・通信	交通・保険等
11 万円／月	8 万円／月	4 万円／月	4 万円／月	7 万円／月

毎月の生活費
34万円
仮の家計支出

備える期間
18か月
収入変動の準備

目標資金
612万円
34万円×18か月

準備の項目	単純な資金の組み立て例	金額
2026年時点の生活用貯蓄	サンプル設定・現時点の保有分	**132万円**
2026〜36年の積立	月4万円×120か月（仮）	**480万円**
立候補判断時の生活防衛資金	利息・臨時支出・物価変動なしの単純計算	**612万円**

住宅取得と政治活動は別枠で考える

住まいの費用
購入する場合は頭金、諸費用、返済、税金、修繕費を別計算。2035年の家計予備資金612万円を住宅購入に流用しない。

政治活動の費用
学習・地域活動と選挙の費用を分離。供託や選挙手続きなどは目指す選挙と時点の公式情報で確認し、家族の生活費から安易に出さない。

数字は全て企画構成を示すための仮定であり、物価、子育て費用、手当、収入、住宅費、選挙費用の実際の見積もりではない。結婚・子ども・立候補は確定した将来ではない。

11／一本道に見えて、選択肢は残す

二つの道が重なって、 一人の人生になる。

この企画書は、未来を「当たるかどうか」で試す予言ではない。35歳の自分が何を大切にして、何を選ぼうとしたのか。その選択を具体的な年月と行動として残すためのものだ。

2026–29	会社員として学び、資料を読み、地域の課題を「説明できる問題」に変える。
2030–34	地域の人が検討できる提案をつくり、自分の仕事・暮らし・資金を点検する。
2035–37	出馬を判断する。結果に応じて公的な役割へ進むか、別の道で地域活動を続ける。
2038–54	議員であれば議論・検証を続け、そうでなくても社会への関わり方を更新する。
2055–63	経験と資料を引き継ぎ、肩書きを離れても暮らす地域とつながり続ける。

そのとき、35歳の私は何を見たかったのか。

大きな肩書きを持つ自分ではなく、ひとつの問題を見過ごさず、学び、誰かと考え、次の人に手渡していく自分だった。その歩みを、まだ生きていない今から、企画してみる。

現実の人生は、この通りに進むとは限らない。だからこそ、年月ごとの「行動」「判断」「必要な条件」を記し、予定が変わっても次の道を組み直せる企画書にする。

制度確認用の参考：東京都選挙管理委員会「選挙運動と政治活動」／公職選挙法（e-Gov）／各自治体の選挙管理委員会。選挙制度の説明は制作時点の公式情報に沿い、将来の制度を予測しない。

政治家として学び、担い、手渡していく道。家庭を築くかどうかを含め、配偶者の希望、子どもの成長、住まい、お金を見つめ直す道。どちらか一方のためにもう一方を犠牲にするのでなく、節目ごとに両方の設計を更新する。

まだ生きていない人生にも、ひとつの構図がある。